４．ヘルスコミュニケーションウィーク 2023～福島～
第３回日本メディカルコミュニケーション学学術集会報告
「医療“専門家”としての当事者たち：専門知と実践知の融合を目指して」

岩隈美穂
京都大学医学研究科　医学コミュニケーション学講座

第３回日本メディカルコミュニケーション学会学術集会が、2023 年 9 月 30 日にコラッセふくしまで行われ、今年の大会テーマは、「医療“専門家”としての当事者たち：専門知と実践知の融合を目指して」としました。実践知とは、熟達者が持つ実践に関する知性であり、熟達者とは、ある領域の長い経験を通して、高いレベルのパフォーマンスを発揮できる段階に達した人を指します。通常、患者や障がい当事者たちは、医療の消費者、サービスの受益者と思われていますが、病や障害の経験から「こまったこと」に関する医療の「実践知」の専門家ではないだろうか、という問いかけをこのテーマに込めました。なお３名の予定登壇者のうち一名が体調不良で欠席のため、大会長(岩隈美穂)が代演を行いました。

岩隈による最初の講演、「エイジングインプレイス（とピアサポート）の実践家としての障害当事者たち」は、以下のインタビューデータから始まりました。

A：(年を取ることに関して不安は）ない。だってこれ以上もう装備はあり得ないほど完璧に装備してるからね。住宅は改造してるし、訪問看護入れてるし、呼吸器、酸素、鼻吸い装置は用意されてるし・・・専門家って感じだな。

障害当事者たちから、昨今推進されるようになってきたエイジングインプレイスの秘訣を聞く、という講演内容でした。「縦横」の実践知として、これまで行ってきたインタビューデータを引用しつつ、横の実践知はピアサポート、縦方向の実践知は、障害を持ちながら地域で生活をする秘訣を、障害当事者たちによる実践知として紹介しました。

二人目の蛭川涼子さんは（NPO 法人自立生活センターSTEP えどがわ　スタッフ）「自立生活運動とピア・カウンセリング：自立生活センターがピア・カウンセリングを大事にする理由」というタイトルで、自立生活運動とピア・カウンセリングの歴史や、アメリカから導入された自立生活センター（CIL）について、ご自身の体験も交えて話されました。そしてピアサポートとピア・カウンセリングの違いについても言及し、ピアカウンセラーはピア・カウンセリングの目的とルールに基づいての実践者で、ピアサポートの一部ということでした。最後にピアサポートの今後として、令和３年度から始まった、ピアサポート体制加算の説明と展望について話されました。この制度は障害福祉サービス等報酬改定において、相談支援（計画・地域・障害児）および自立生活援助、就労継続支援 B 型で、障害者（ピアサポーター)を雇うことで報酬に加算を設けるというもので、都道府県が実施する「障害者ピアサポート研修」の受講が条件です。近年始まったピアサポート加算が障害当事者の実践知が医療保健福祉領域で仕事として活かされる社会に大きな期待を寄せていました。

三人目の山口育子さん（認定 NPO 法人ささえあい医療人権センターCOML　理事長）は、「協働と参画：患者・市民にできること」というテーマでの講演でした。「賢い患者になりましょう」を合言葉に 1990 年から活動している実践知について、「患者・市民参画（PPI：Patient & Public Involvement)」というキーワードを中心にお話されました。PPI というと、近年は患者だけでなく市民も参画する必要性が注目され、COML で行っている医学教育に一般市民が参画している模擬患者（SP)、医療機関の改善のために患者視点で提言・提案する病院探検隊、そして、政策提言を含めた意見具申について紹介がありました。そして治験や臨床試験の倫理審査委員会や医療安全に関する監査委員会などでの一般委員の重要性が高まりを受けて、2009 年度から始まった「医療をささえる市民養成講座」について、その意義や参加者たちの動機、コースの概要が語られました。

様々な立場から当事者たちの持つ実践知が紹介され、最後に全員で場内からの質問を受け、盛会に終わることができました。